

岩見隆夫著「演説力 - わかりやすく熱い言葉で政治不信を吹き飛ばせ - 」

原書房、2009年8月17日刊を読む

演説を復権しなければならない - 自分の論旨を平明に語る -

1. 第一に「自分の論旨」。借りものの官製ペーパーなどではなく、自分のなかで骨肉化し、しかも筋道の立った主張の展開が前提である。それには自身の内部での葛藤、熟慮の積み重ねが不可欠だろうし、さらに文章化も必要になってくる。戦前と違って、戦後は草稿を書く政治家は少なくなかった。戦前も大隈重信のように書かないでしゃべっても、そのままきちんとした文章になった政治家もいるが、それは例外的なケースで、草稿を練ることは、「自分の論旨」を確かなものにするのに欠かせないと思われる。「書く」ためのエネルギーを省略する政治家が増えたことが、まず演説の質を落とす原因になっている。言論は^{とういそくみよう}当意即妙だけでは成り立たない。
2. 第二に「ちゃんと」。この意味はとりわけ重要だ。論旨がまとまっておればそれでいいというのではなく、ごまかしのない本音をきちんと伝える勇気があるかないかである。中山千夏がいうように、上手にしゃべればしゃべるほど不信感を抱くのは、これまでの政治演説がハラのうちにあるのと違うこと、逆なことを言っていると思われてきたからで、そう思われても仕方ない面があった。「私は真実を語っている」と何回繰り返しても、^{くうそ}空疎に聞こえることが多かった。聴衆は「真実の叫び」であるかどうかを本能的に^か嗅ぎわけるし、「真実」ということばをわざわざ使わなくても、十分に伝わってくる。聴衆との知的交流とは、そういうデリケートなものであることを政治家側はもっと深く認識すべきであり、うまく言いくるめたとおもっても、ほとんど失敗している。
3. 第三は「平明に」。いうまでもなく、聞いてわかるように話すことである。表現技術の領域でもあるが、政界だけで通用する「永田町ことば」が無神経に使われる場面が多い。また政界では常識になっているからといってそれを押しつけ的に省略して話されても通じない。ときに状況描写も^{まじ}交え、プロセスも説明し、専門用語は^か噛みくだいて語る親切さが肝心だ。ことに最近の傾向は、数字の乱用である。数字は必ずしも話をわかりやすくするとは限らない。演説を無理に権威づけたり、聴衆を煙に巻いたりするために数字を使うのは、「平明に」に逆行するものだ。
4. そして最後の第四は「語りかける」。聴衆を話の中に引き込み、聞かせるための熱意と工夫である。この点は、対話調の演説巧者が増えているが、単に話術の問題ではなく、演説者の内面が問われる。第一から第三までの要素が備わってはじめて、真剣に語りかける姿勢が整う、という

ことだろう。

- 5 . いささか説教調になったが、以上述べたことは、演説不作の時代をぬけ出て、復権させるための基本動作ではないかと思われる。この四つの条件を満たした演説家が、いまの政治家のなかに果たして何人いるだろうか。言うまでもないことだが、ことば・演説・言論を通して、政治と国民が深く結びつき、国民の信頼のもとで政治が運営されることこそ民主主義のベースである。
- 6 . 結びつきが弱ければ、政治は有効に機能しない。そのおそれが色濃く出ている現状に、私は強い不安を抱いている。聞かないではおれないような、イキのいい演説が増えることを願うほかはない。

P 255 ~ 257

[コメント]

政治家に限らず公の場、つまり人前で人にものを語る立場にある人は、その場での自分の社会的使命を自覚して岩見氏が本書で示して下さった4つの条件を満たすことを心掛けたい。日本のすべての指導的立場にある方への熱いメッセージ集。

- 2010年10月26日 林 明夫記 -